

滞在許可などの深刻な問題などに直面すると、自分が「国籍」にしばられ、ある場合には法律によって決められた国を自分の国とするしかないことを思い知らされます。そのようなとき、個人と「国」、「法律」と生活などの間にあるたくさんの問題が浮き彫りになってきます。

◆「学力」をどうとらえるか

国際紛争の処理に直接結びつくような決断をする人はほんの少数にちがいませんが、今の子どもたちのだれかが、将来その立場に身を置くことは確かなことです。また、一つ一つの決断は、大統領や首相などの個人によってなされるように見えても、そこに至るまでには、大勢の人々の意見や、世論の動向など、たくさんの力がはたらくはずです。広い目で世界のできごとを見ることができる人を一人でも増やすこと、一人一人の洞察力を少しでも深めることなどが、未来の世界を救うこととなります。

若い人たちの力をつけるということから見れば、これは本来の意味での「学力」の問題ということが出来ます。今や「学力」は、国の将来を左右すると言うだけでなく、違う国に住む人たちも力を合わせて取り組まなければならない重大な課題なのです。そして、海外に住む経験は、子どもたちに、「学力」をつけるための貴重なチャンスを与えていると言えます。この機会を生かさない手はありません。

最近、日本で、文部科学省が春に実施した全国学力調査の結果が発表されました。例によって、マスコミで大々的に取り上げられ、少しの差の都道府県のランキングに一喜一憂する姿が報道されました。おそらく、これから、得点の高かったところで学校や自治体の取り組みが賞賛されたり、得点の低かったところで責任のなすり合いが起きたりすることが予想されます。

心配なのは、学力テストの点数を上げることが至上命令になり、目先の点数に結びつかないようなものは、軽視されたり、不要とされたりすることになるのではないかということです。10年ほど前、アメリカで州の学力テストが導入され、その点数によって学校が評価されるようになって来た時、学校でテスト準備の時間が増えた反面で、私たち教師がよい活



決勝戦で

動だと思っていた行事が少しずつ姿を消していったことが思い出されます。

「学力」を調べるために、テストは客観的で、有効な手段であることは確かです。しかし、どんなテストにしても、それで測ることができるものは子どもの力の中の非常に限られた部分であることをわきまえておかなければなりません。また、テスト対策が盛んに行われるようになると、そのテストで測った結果が、本来測りたい学力ではなく、テスト対策の有効性を反映するにすぎないものになる恐れもあります。

子どもたちの学力がどんな状態なのかについては、テストの結果を参考にしつつも、子どもたちの生活の様子、具体的な学習の様子を注意深く見つめて、いろいろな角度から検討を加えなければなりません。学力を単に「高い」か「低い」という一つのスケールでとらえようとするのは大きなまちがいです。

先年、OECDのPISAテストでフィンランドがよい成績を取めると、日本からの視察が殺到して、フィンランドの人たちがびっくりしているという話を聞きました。はるばる出かけた人たちが、テストの点数を上げることでなく、子どもたちを本当に賢く育てるために視察の成果を生かしてくれることを願いたいと思います。「学力」が問われているのは、子どもたちだけではないのです。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター
〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15
電話：042-541-1003
ホームページ：www.keimei.ac.jp
Eメール：kokusai_info@keimei.ac.jp



「学力」を真正面から捉えた、佐々先生の考察です。賛成です。
「学力=テストの成績」が蔓延しています。先生がここで議論するように、「学力」が子どもが成長し生きるために「賢く育てる」ためのものならば、テストの成績だけでは捉えられません。

日本とアメリカの教育の中での「学力」は、本誌の中心テーマのひとつです。それは、「海外でどんな子どもに育てるか」を考え、実践することの元になるからです。海外での子どもの教育の大きな枠の中での「学力」を、皆さんと一緒に、お子さんのために考えてみたいと思います。